

開港のひろば

編集・発行／横浜開港資料館（財横浜開港資料普及協会）
発行日／平成9年2月7日(金)

Number
55

横浜市中区日本大通3番地 〒231 電話(045)201-2100
印 刷／中川印刷株式会社



駒田商店缶詰ラベル帖 1930年頃 大塚十三氏寄贈

企画展

■館蔵資料展

「横浜の近代 PART III」

駒田商店関係 缶詰ラベル・絵葉書



横浜根岸之魚釣 1908年頃

駒田絵葉書コレクション 大塚十三氏寄贈

駒田商店は明治・大正・昭和にかけて、横浜を基点とし食料品・雑貨の輸出入に従事した貿易商である。南区在住大塚十三氏より当館に寄贈された資料の中には、駒田家関係の資料が含まれていた。ひとつは駒田商店が扱った蟹缶詰・鮭缶詰などのラベルである。いまひとつは二、五〇〇枚をこえる絵葉書で、家族や友人との間でやりとりしたもののが大半をしめ、消印から絵葉書の年代が特定できる。

駒田商店の創業者、駒田常三郎は文久三年（一八六三）三重県に生まれ、横浜開港資料館にて、

れ、伊勢松阪の木綿問屋長谷川家に奉公に入るが、二七歳の春、渡米を決意しサンフランシスコに赴く。やがてその地で日本料理店大黒屋と雑貨店駒田商店を開き成功をおさめる。その後一時帰国し、横浜の長者町に本店を新設、サンフランシスコを支店とし、食料品・日本雑貨の輸出入に専念する。事業の拡大とともにない、ユタ州オグデン、ワイオミング州シャイアンに支店を開設するほか、カリフォルニアに醤油製造所を開き、また北米貿易株式会社を設立した。日露戦争以後は満州に事業を展開し、大連・鐵嶺・奉天に支店・出張所を開設し、食料品・雑貨および銃器弾薬などの軍需物資を輸出した。

二代目駒田富三郎は一八七六年愛知県に生まれ、名古屋の中学を卒業後アメリカに留学、のち常三郎の娘久子と結婚した。富三郎は蟹缶詰造事業を飛躍的に拡大させ、一九〇七年には五、六百個であったアメリカへの輸出は一九一七年には十二万個を突破した。富三郎一家は一九一九年帰國し（常三郎はすでに帰国）、磯子に居を構える。その後本店を元濱町に移すが、昭和に入り戦雲の広がりとともに事業は衰退し、日米開戦、一九四二年の富三郎の死去により駒田商店はその幕を閉じた。

今回の展示によって、世界を舞台にした横浜商人の足跡の一端を紹介できれば幸いである。なお、本展示の開催にあたっては駒田恒子氏のご協力をえた。

（伊藤京美）

■館蔵資料展■

「横浜の近代 PART III」から

今回の展示は好評を博した「横浜の近代」の第三弾として、パートI、パートIIの枠組みを生かし、新たに整理・収集した資料を盛り込んで構成したものである。そのいくつかを紹介しよう。

咸臨丸模型

咸臨丸は幕府がオランダに注文し、一八五七年長崎に回航された三檣コルベット艦で、百馬力の蒸気機関をもつた機帆併用船である。長崎海軍伝習所の練習艦として、日本人船員の養成に使われていたが、万延元年（一八六〇）、日米通商条約批准書交換の遣米使節団を乗せたボーハタ号の隨行船として太平洋を横断した。

咸臨丸には、提督・木村摶津守喜毅、艦長・勝海舟など約百人が乗り込み、使節一行に先立ち二月二五日（陽曆三月十七日）サンフランシスコに到着して、暖かな歓迎をうけた。その後使節がワシントンにまもなく到着の報を受け、咸臨丸はハワイ経由で四カ月半ぶりに帰国した。

咸臨丸はその後小笠原諸島の測量に派遣され、また北海道開拓使の物資運送船となり、さらに民間の回漕会社に移り明治三年（一八七〇）北海道沿岸で座礁するまで、幕末明治の激動の日本を見つめた船であった。先ごろ、磯子区在住の武川伸治氏より、木村摶津守喜毅の曾孫木村昌之氏の要請を受け作製された咸臨丸

の模型が当館に寄贈された。縮尺は原寸の五〇分の一、高さ約八〇センチ、長さ約一二〇センチで、二年半あまりの時間をかけて完成された精緻な模型である。今回は木村喜毅関係の資料とあわせ咸臨丸コーナーを設けて展示した。

ペリー艦隊日本遠征図

M・C・ペリーは、一八五二年十一月二十四日、旗艦ミシシッピー号でヴァージニア州ノーフォークを出航し、日本への遠征に向かった。図は当時ボストンで発行されていた英字新聞GLEASON'S PICTORIAL紙の一八五三年二月十二日号に掲載された、ペリー艦隊日本遠征図（A Superb View of the United States Japanese Squadron, under Command of Commodore Perry, bound for the East.）である。

図の左からブリンストン号、ヴァーモント号、アレガニイ号、セント・マリーズ号、マケドニア号、バンダリア号、プリマス号、サラトガ号、ミシシッピー号、サスケハナ号、ボーハタン号を配し、荒波を突き進むペリー艦隊の威容が描かれている。しかしこれは当初予定されていた陣容であり、プリンストン号などは整備上の問題により艦隊に参加しなかつたし、また全艦隊がうちそろって出発したのではなく、十一月二十四日にノーフォークを出航したのは、ミシシッピー号一隻だけであった。サス

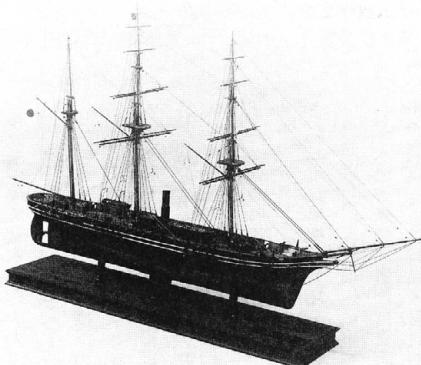
ケハナ号、プリマス号、サラトガ号、サプライ号、ミシシッピー号と合流したのは、四月以降のことである。

したがってこの図はあくまで想像図ではある

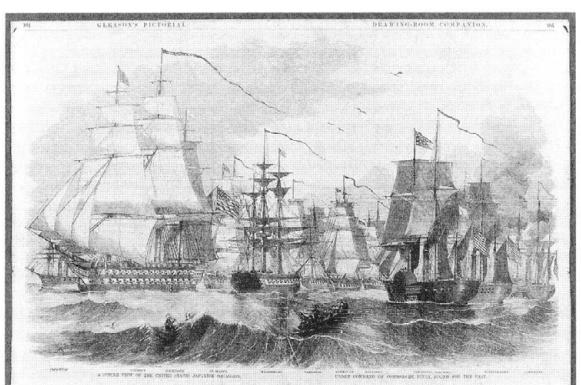
が、解説の記事には七隻の等級、トン数、乗組員数、備砲数等が記され、この強力な艦隊は今後降りかかるどのような抵抗も乗り切ることができようと思われる。じられ、日本遠征への期待の高さがにじみ出でいる。

新聞でも日本関係の記事が数多く掲載された。今回、ペリー艦隊日本遠征図とともに、新たに収集した当時の英字新聞ILLUSTRATED NEWS紙（ニューヨーク発刊）から、ジョセフ彥をふくむ日本人漂流民の肖像

ペリー肖像、また日本風物紹介の絵と記事を新収めた。また全艦隊がうちそろって出発したのではなく、十一月二十四日にノーフォークを出航したのは、ミシシッピー号一隻だけであった。サス



咸臨丸模型 武川伸治氏作製・寄贈



ペリー艦隊日本遠征図 GLEASON'S PICTORIAL 1853年2月12日号

川和の菊

中山恒三郎育成の「男山」
『菊の香』(1910年 明治43年)より

今日でも秋には各地で菊花展が開かれる。横浜の歴史のうえでも、生糸商茂木惣兵衛別邸や神風櫓の観菊などが確認できる。菊花は東アジア原産であり、日本の菊花は広く世界に普及して、日本文化の伝播の一端をない、新奇をきそつて盛んに栽培された。現在の都筑区川和の「松林園」中山恒三郎家はそのような菊花の名所として著名であった。

一九二九（昭和4）年刊行の『御

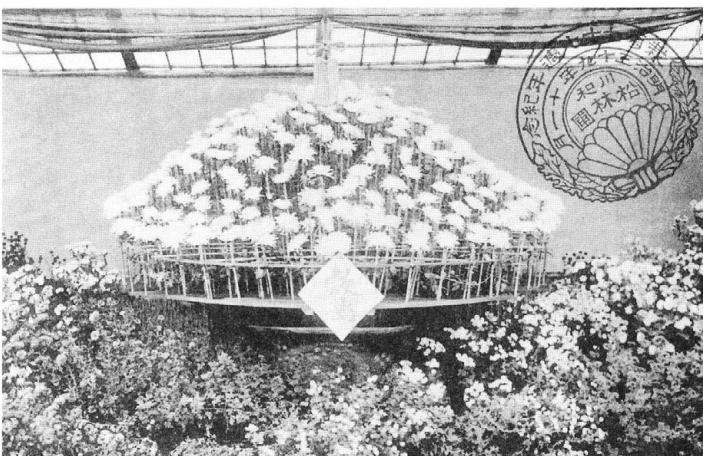
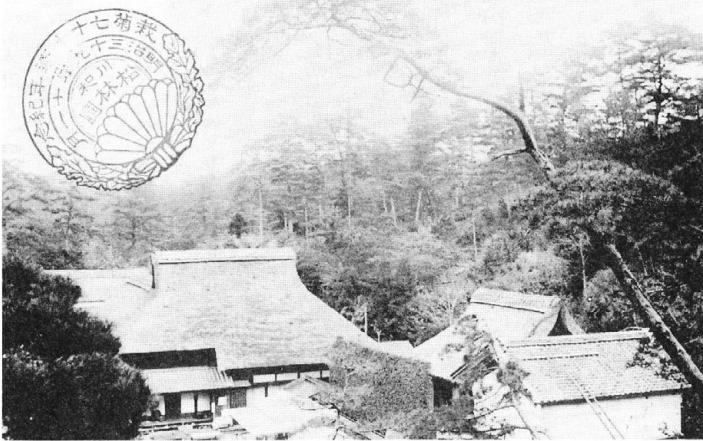
大典記念 都田村誌によれば、中山家は、一八二七（文政10）年幕臣松浦某より秋菊苗二十余種類を譲り受け、新種育成に努力した。嘉永期には三百種にまで品種を増やした。一八八一（明治14）年宮内省に菊苗十二種を献納し、以後昭和初期までに八十三種を献納している。九年には有栖川宮が、ついで閑院宮・北白川宮・久邇宮などの皇族も来訪した。アメリカ人女性ジャーナリストであるスキッドモアの日本紀行書『ジンリキシャ・デイズ・イン・ジャ

パン』（一八九一年刊）には、中山家の菊園が紹介されている。外国人が人力車を駆り、松林園の菊花を愛でに来る情景を目に浮かべてよいであろう。昭和初期の菊園の敷地は、実に五〇〇坪におよんだ。菊花は大別して大菊・中菊・小菊に分かれ。大菊は今日菊花展に多く出品されるもので、「二字字」「御紋章菊」「厚物」などに代表される。小菊は懸崖造りなど盆栽仕立てにくられるものをいう。中菊は江戸期から明治期にかけて流行し、とくに

一八八九（明治23）年、曾瀬荒助（翌90年衆議院書記官長、のち枢密顧問官、韓国統監）を会長に、全国組織で養菊団体「秋香会」が設立された。中山は一九〇四年（明治37）には秋香会中菊部長に就き、一〇年には菊花・菊葉の写真譜である大著『菊の香』を発行。一年には東京府立園芸学校教授を嘱託され、一五（大正4）年には林博太郎（貴族院議員）会長のもとで、秋香会副会長に就任している。

『菊の香』の特徴は、菊花を横・上・斜めから、立体的に写真におさめ、花の特徴を和英両文で解説しているところにあるが、松林園が育成し、明治天皇が愛好した名花「男山」では、とくに希有なくるいを呈したものと、男山種発生当時の写真をあわせて掲載して、改良のさまを示している。

川和の菊園には、松林園中山家とともに、「虎渓園」なる菊園があるが、今回紹介する川和の菊に関する資料は、中山家の分家にあたる中山浩二郎氏より寄贈されたものである。横浜近郊農村史の忘れられた一



「松林園」中山家栽菊七十七周年記念絵はがき 1906年（明治39）11月
上：中山家
下：菊花「數島」
(都筑区川和台・中山浩二郎家寄贈)

花弁の「くるい」（変幻奇化）を引き、中菊のなかで進化卓抜したものを「正菊」と称し、松林園ではこの正菊を主に栽培し、大日本正菊協会を組織した。總裁には樺山資紀（海軍大將・初代台灣總督など歴任）がつき、顧問には渡辺千秋・横井時敬ら華族・高官の名前がある。

一八九〇年衆議院書記官長のち枢密顧問官、韓国統監）を会長に、全国組織で養菊団体「秋香会」が設立された。中山は一九〇四年（明治37）には秋香会中菊部長に就き、一〇年には菊花・菊葉の写真譜である大著『菊の香』を発行。一年には東京府立園芸学校教授を嘱託され、一五（大正4）年には林博太郎（貴族院議員）会長のもとで、秋香会副会長に就任している。

『菊の香』の特徴は、菊花を横・上・斜めから、立体的に写真におさめ、花の特徴を和英両文で解説しているところにあるが、松林園が育成し、明治天皇が愛好した名花「男山」では、とくに希有なくるいを呈したものと、男山種発生当時の写真をあわせて掲載して、改良のさまを示している。

川和の菊園には、松林園中山家とともに、「虎渓園」なる菊園があるが、今回紹介する川和の菊に関する資料は、中山家の分家にあたる中山浩二郎氏より寄贈されたものである。横浜近郊農村史の忘れられた一

「横浜にペリー銅像を!!」

—未完の銅像建設計画—



①ニューポートのペリー銅像（米山『開国先登提督彼理』から、横浜市中央図書館蔵）

これまで何度か、横浜にペリーの銅像がありますかとの問合せを受けたことがある。日本の開国と近代化の恩人として、ペリーを顕彰しようとする運動は、繰り返し試みられ、横須賀市久里浜には、一九〇一年米友協会により伊藤博文揮毫の「北米合衆国水軍提督伯理上陸紀念碑」が、また黒船祭りで有名な下田市には、一九六六年にペリー胸像を戴く来航記念碑が建てられている。

小稿では、横浜での銅像建設計画を中心に、ペリー顕彰の足跡を辿つてみたい。

米山梅吉著『開国先登 提督彼理』
日本で出版されたペリー伝の嚆矢である。米山は三井銀行取締役（三井信託銀行社長を歴任した昭和戦前期の財界人で、また『幕末西洋文化と沼津兵学校』の著者として馴染み深い。本書は、米国留学後ジャーナリストを志した彼の第一作で、内容はグリフィスのペリー伝（一八八七年刊）に拠る。文中「米国ニューポートの公園に於ける彼の銅像」①を掲げて、像は二六年前に女婿ベルモントが建立し、高さ約五メートル、

台座周りには米墨戦争、久里浜での銃撃などがある。日本の開国と近代化の恩人として、ペリーを顕彰しようとする運動は、繰り返し試みられ、横須賀市久里浜には、一九〇一年米友協会により伊藤博文揮毫の「北米合衆国水軍提督伯理上陸紀念碑」が、また黒船祭りで有名な下田市には、一九六六年にペリー胸像を戴く来航記念碑が建てられている。

小稿では、横浜での銅像建設計画を中心に、ペリー顕彰の足跡を辿つてみたい。

これまで何度か、横浜にペリーの銅像がありますかとの問合せを受けたことがある。日本の開国と近代化の恩人として、ペリーを顕彰しようとする運動は、繰り返し試みられ、横須賀市久里浜には、一九〇一年米友協会により伊藤博文揮毫の「北米合衆国水軍提督伯理上陸紀念碑」が、また黒船祭りで有名な下田市には、一九六六年にペリー胸像を戴く来航記念碑が建てられている。

小稿では、横浜での銅像建設計画を中心に、ペリー顕彰の足跡を辿つてみたい。

これまで何度か、横浜にペリーの銅像がありますかとの問合せを受けたことがある。日本の開国と近代化の恩人として、ペリーを顕彰しようとする運動は、繰り返し試みられ、横須賀市久里浜には、一九〇一年米友協会により伊藤博文揮毫の「北米合衆国水軍提督伯理上陸紀念碑」が、また黒船祭りで有名な下田市には、一九六六年にペリー胸像を戴く来航記念碑が建てられている。

小稿では、横浜での銅像建設計画を中心に、ペリー顕彰の足跡を辿つてみたい。

英文のペリー銅像建設趣意書

当日配布された趣意書と思われる英文パンフレットがある。本文七頁の和綴じ本、表紙は全体に濃紺で、星夜に富士と外輪船を描く。口絵に藤田作のペリー胸像、全身模型二種と全体の概念図(②～④)がある。

全身像は、米国政府提供のニューポートの銅像写真に基づいて製作されたが、目下最終候補を選定中で、台座デザインは公募の予定、とある。日本開国と文明化の恩人として、井伊と並べてペリー銅像を建設したい旨の趣意に続き、胸像はニューポートの銅像や日本人絵師による当時の絵図、ペリーと実際に会った古老人の助言等を参考にしている、建設地は横浜公園、経費約二〇万円とある。

知事の報告では、米領事館が藤田の依頼でパンフの配布を仲介したと証言し、新聞は、会場のペリー胸像は周布の求めで特別に製作されたと報じた。米国艦隊を歓迎し、日米友好を表現するのにペリー像ほど格好なものはない。当時周布が銅像建設をどう考えていたのか不明瞭だが、

歴史書や新聞で、また記念絵葉書に

彫塑家藤田文藏らの計画

一九〇〇年末、ペリー艦隊プリマス号生き残りの退役海軍少将ピアズリー夫妻が来日、東京や横浜で歓迎を受けた。この機会にピアズリーは、米副領事シッドモア、横浜の大谷嘉兵衛らと久里浜の上陸地点を踏査し、建碑予定地の木標を建てた。

その後、米友協会（会長は金子堅太郎）により準備が進められ、翌年七月に金子とペリーの孫米国東洋艦隊司令官ロジャース少将の手で記念碑が除幕された。ピアズリー来日を機に芝山陰士（土屋元作）「ペルリ渡来の顛末雨夜物語」が刊行、除幕式に県立一中教師平戸大『北米合衆国水軍提督ペリー久里浜上陸誌』が配布され、また前掲米山著の増訂再版と、この年はペリー顕彰の一つのピーケとなしたのである。

次回のピーケは、一九〇九年の横浜開港五十年祭であった。近代横浜及び日本の始点として、日米和親条約の意義やペリーの功績が顧みられ、歴史書や新聞で、また記念絵葉書に

取り上げられた。同年、港を見下ろす帰部山に大老井伊直弼の銅像が建立されたのは周知の事実である。

この前後、横浜にペリー銅像を建立しようという計画が進められた。その中心は、井伊銅像の原型製作者

藤田文藏であった。藤田は、女子美術学校長で、有栖川宮始め維新官僚の彫像を多く手掛け、明治政界とも太い縁故を持つていた。藤田がペリー像製作を発意したのは日露戦後、七月に横浜の外国商社員原田章吉を渡米させ、遺族のベルモントやロジャースとも会見させた。ニューヨーク駐在領事は、原田の行動に不審を抱き、周布神奈川県知事や大谷嘉兵衛らの依頼を受けてペリー像建設費用募集のため渡米したとの主張の真偽を本国外務省に打電した。周布は、原田の言を否定すると共に、計画の内偵を進め、翌年七月その調査結果を報告した（『外務省記録』）。

報告によれば、藤田は大陸重信や陸海軍将校、米國領事館員らの賛同を得て、建設経費を二〇万円とし、内外人から寄付を募る等の大綱を定め、幹旋役を大谷や総領事ミラーに依頼した。また建設地として英領事館ついで米國領事館敷地を挙げて横浜市長と交渉したが同意を得ず、現在は井伊銅像に併置すべく交渉中の様子である。一九〇八年一〇月の米国大西洋艦隊歓迎会の折、会



⑤『時事新報』1909年6月
28日付

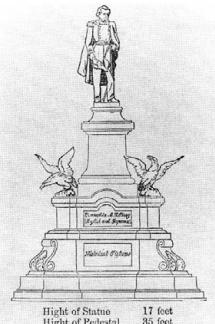
その後計画は進展せず、藤田らは翌年七月一日の開港五十年記念式典を期して建設設計画を発表し、会場で趣意書を配布しようとした。事



②藤田文蔵製作のペリー提督胸像



③藤田作の銅像原型（No.3とNo.12）



④銅像全体のスケッチ

米友協会員の計画

実、六月二八日付『時事新報』は、「ベリー提督銅像建設」の見出しで英文パンフ口絵の胸像②と同一の写真を掲載し、来る一日に計画発表の予定と伝えている(5)。しかし、これも結局不発に終ったようだ。周布は、報告の末尾で、「該銅像ノ建設ハ本邦ノ体面其他各種ノ方面ヨリ研究シテ到底之ヲ認可スヘカラ」と、計画の根絶を具申した。

会員が計画推進者として登場する反面、藤田らの計画や渡米中の原田の活動には全く触れていない。

もずっとこだわり続け、一九三三年秋
三越本店で開催の日本外交史料展覽會に
「ペルリ提督の塑像一台」を出

報告書には建設同志会の趣意書と賛同者名簿が添付されており、世論の動向を窺って発会の予定だったが、結局未発に終ったようだ。一九一〇年七月七日の『原敬日記』には、大隈が、米国の官吏であるペリーを恩人視し銅像騒ぎをするとは何事かとの小村外相や桂首相の駁論に屈し、会長職の内諾を取消したとある。

ところが平成三年、「松戸新聞」が市内の石材店鹿子清豊氏方に六メートル大のペリー全身石膏像が保存されていると報じた。先代の豊蔵氏は石工仕事の傍ら藤田文藏に彫刻を学んだ人で、像は関東大震災後に着手し、戦後は文藏の嗣子頼光と一緒に製作を続けた未完の像で、清豊氏によれば、米国ニュースペーパーのペリー像写真を参考にして、銅像に仕立て山下公園に設置する予定であったらしいとのことであった。巨像は破損して現存しないが、一メートル大の原型像が残っている（⑥）。

政府はペリーに米首脳の姿を重ねさせ、中国を威嚇する意図で露海戦での勝利は、米国に日本脅威論を増幅させ、中国大陆や太平洋への進出を強く懸念させることとなる。米西海岸の日本移民排斥は排日運動へと発展し、また日本を牽制する民主党タフト政権の満鉄中立提議は、逆に日本人の反米世論を刺激するものとなつた。政府は、ペリー像が対日強硬をとる米政府の象徴となり、反米世論が銅像建設で増幅され、政府批判に転化するのを極度に警戒したであろう。



⑥鹿子豊蔵作のペリ 修（吉子清蔵手稿）

報告は、周布報告では不明な五十年祭以後の動向を伝えるが、米友協

しかし、早晚発足する予定で、経費はペリーの遺族と在米邦人で負担、建設地は神奈川町という。

松戸のペリー像

横浜でのペリー銅像は、結局実現しなかった。しかし藤田は、その後

のを極度に警戒したであろう。
松戸のペリー像

青木俊夫、堀勇良各氏のご教示を得た。記して感謝したい。（佐藤孝）

生糸売込商の 製糸業への進出(2)

生糸の品位

前号で生糸売込商が直接・間接に製糸業に進出する積極的動機は、優等糸製出にこそ求められるのではなかと論じたが、それなりに理由があつてのことである。

生糸には品位に応じて「格」がつけられる。太さにムラが少なく、光沢に富んだものは高級であり、優等糸として取引される。逆に太さムラがあったり、光沢に乏しかったり、糸に節のようなものがあつたりすると、撚糸機や織機にかけたときに切断がおきやすい。このような生糸は低級である。

日本国内をみると、低級糸の代表は信州諏訪地方の「信州上一番」格の生糸であり、量的にも大量に生産された。高級糸の代表格は山陰地方の山陰製糸・米子製糸、三重の室山製糸などであり、明治後期からは、京都の郡是製糸が生産量を拡大し、最優等格の生糸が、「郡是」格と称される場合もあった。

売込商系製糸の糸格

第2表は、一九一〇年代後半から二〇年代初頭の売込商系製糸場の糸格をしたものである。最優等格・準優等の矢島格までが優等糸と広義では評価できるが、当時は低級糸需要を人造絹糸(レーヨン)に奪われつゝあり、優等糸・準優等の割合が急

速に拡大している時期である。したがって、二〇年代前半には、最優等格では表現しきれなくなつた優等糸は、「最優等〇〇円高」と呼ばれることとなる。第2表では年代があるんでしまって、旧い時代の方が実際の格付を示している。

一九一六(大正五)年の最優等格製糸場のうち「飛切優等」としてランキングされているのは、茂木系の

三龍社と原系の原名古屋であり、「飛切上」は原富岡である。この三社は全国的にみても優等糸の代表格である。これに次ぐのが茂木系の信勝社であり、優等II「飛切」格である。この四社は一九一〇年のニューヨーク市場で付けられた商標に対する格付や二年の格付でも、一貫して最優等・優等に位置している。

一六年において「準優等」に格付けされた茂木製糸・龍興社(どちらも群馬)の茂木系製糸、草薙合資(山梨)・盛進社(神奈川・結社)の若尾系製糸は優等糸製糸の末尾にいるが、さらに下位の日新館(埼玉・茂木系)を含めた五社についていえることは、それぞれの県の製糸場のなかにおいて、最高の格付けを得てゐることである。(群馬の二社は原富岡に次ぐもの)。このことに注目するのは、自然条件・換言すれば繭地盤に規定されつつも、これら売込商に蚕種を販売したので、蚕種家と養蚕家とは固定的な取引関係になる場合もあり、そのため蚕種家の養蚕家の種の販売権は、「種場」と称して売買の対象となつたのである。そ

うして、蚕種家は飼育技術の教授とともに個別的な関係を結ぶことが多かつた。蚕種家は飼育技術の教授とともに蚕種を販売したので、蚕種家と養蚕家とは固定的な取引関係になる場合もあり、そのため蚕種家の養蚕家の種の販売権は、「種場」と称して売買の対象となつたのである。そのような関係が旧来からあるところに、製糸家が介入して原料繭を統一シフトしていく証左といえるからである。

若尾系の結社盛進社の中心的存在である持田製糸については、前号でも紹介した蒸氣による若持式煮繭術の開発のほかに、優良蚕種の配布といい、その本格的展開は昭和恐慌以後であるが、第2表の特別優等・優等のレベルにある原富岡・原名古屋・三龍社・信勝社の各製糸場では一九一〇年代にはすでに導入を確認できるものである。

この蚕種の生糸を出荷したところ「一大声価ヲ揚ケ來リ」「甲州矢島二比シ二十二円高信州上一番格に比シ百円高ノ価格ヲ保ツニ」いたった(詳しくは、持田初治郎「事業經營録」一九一四年刊、を参照)。

優等糸の生産には、女工の熟練や製糸用水の精選、繰糸器械の精巧さ、煮繭の適正などいろいろな条件が必要であるが、その最も重要なものは持田製糸の例にもあるように原料繭の統一にあつた。なぜなら原料繭の統一は、製糸家の外在的な問題、すなわち養蚕家の指導・統制をともなうからである。

旧くから養蚕家は、特定の蚕種家と個別的な関係を結ぶことが多かつた。蚕種家は飼育技術の教授とともに蚕種を販売したので、蚕種家と養蚕家とは固定的な取引関係になる場合もあり、そのため蚕種家の養蚕家の種の販売権は、「種場」と称して売買の対象となつたのである。そのような関係が旧来からあるところに、製糸家が介入して原料繭を統一シフトしていく証左といえるからである。そのためには、持田製糸のように①

優良な蚕種の配布をもつて旧来の関係を断ち、②養蚕家が生産した繭の全量購入を確約すること、の二点が肝要であった。これを特約取引といふ。この仮製器械は日本製器械に対して明らかに高価格の生糸を生産したのみならず、生糸相場の上からも最優等価格に拮抗する糸価を実現す



信勝社の生糸商標
最優等に格付された「鳥」「オシドリ」の商標。
岐阜県中津川市勝野正彦氏所蔵

る。しかしながら仏製器械が採用する直縫方式（生糸を直接大杼に巻き取る方式）。これに対する再縫とは縫糸機の小杼に巻取り、さらに大杼にあげ返すもの）は、日本の湿润な気候下では、糸と糸とが固着するという欠点をもち、仏製器械はほぼ一〇年で姿を消す。

第二は、優良蚕種の開発である。

田口は創業の翌年には外国蚕種の研究にのりだし、黄石丸（黄繭種）・三龍又（白繭種）なる優良品種を開発し、これが全国的なブームとなり、一九一〇年代には田口は全国最大の蚕種製造家として名をはせることとなる。このような圧倒的な優良蚕種の開発とその配布および収繭は、仮製器械を失った三龍社の優等糸生産の主条件となり、三龍社を全国屈指の優等糸工場としておしあげた。

第三は、生産の二重構造である。

三龍社は蚕種の販売の拡大とその繭の受け入れに対応して、傘下に多くの貯挽工場（生糸生産を手数料を払って委託する工場）をかかえるようになる。

非優等糸の生産も増えたと思われ、これを「龍信社」生糸として、「三龍社」生糸とは別に販売している。今日的にいえば高級ブランドとしての「三龍社」、それ以外の「龍信社」と、分離して横浜に出したと考えられるのである。

以上のような優等糸生産が三龍社の経営の基本であり、茂木商店も多額な出資と流動的資金の貸与、優等糸の販売法としての先物市場へ特化

した売却（約定売）という、代金回収で安全な方法の選択などの諸侧面でその経営を支えていった。しかしながら三龍社は一九二〇年の茂木合名の崩壊により資金的後盾を喪失すると、貯挽工場を直営に組み込むことで資本金を拡大し、信用度を高めることで資金供与額の拡大をころみる。前号で見た三龍社の設備金数の拡大はここに理由があり、「三龍社」商標を優等糸に特化する販売方策は崩壊した。また当時は三龍社の優良蚕種は時代遅れとなっており、繭地盤の弛緩とともに優等糸生産に限界が生じたと考えられ、さらには旧貯挽の不良工場の廃止が課題となり、三龍社設備の縮小がおこなわれることとなつたのである。したがって、設備からみた一九二〇年代の三龍社の経営の拡大と縮小は、優等糸生産の側からみれば、マイナス面として位置づけられるものであった。

冒頭で記したとおり、横浜の大生糸商が、多様な品位の生糸需要に応えようとして、確保が難しい優等糸の供給を確かなものとするために、製糸業に進出したことが、証明できたものと考える。ただ製糸業からの史料の発掘が困難な状況のなかでは、製糸場からのアプローチ合いやあり方はさらに個別経営の解明をまたなければならない。横浜の側からの史料の発掘が困難な状況のなかでは、製糸場からのアプローチも今後すすめていかなければならぬ課題であろう。

（平野正裕）

第2表 輸出生糸の糸格別割合と売込商系製糸の糸格

	1912	1916年製糸場格付	1917	1918	1919年商標別格付	1920	1920年商標別格付	1921	1921年製糸格付
最優等 (郡は羽子板以上)	% 5.42	三龍社（飛切優等）【4】 原名古屋（飛切優等） 原富岡（飛切上）【24】	% 5.36	% 5.80	原名古屋（エキストラ）（XX-クラシカル）【6】 原富岡（TO）（XX-クラシカル） 三龍社（金龍）（XX-A）【9】（XX-B） 信勝社（鳥）（XX-B）【9】	% 19.2	(グランドX~XX-A+B)【8】	% 22.94	原名古屋（工場）（特別優等 2500個） 原富岡（工場）（特別優等 2500個） 三龍社（金龍・鷲）（最優等 8500個） 信勝社（オシドリ・麦）（最優等 4500個）
優等（鞠格以上）	4.19	信勝社（飛切）【47】	14.20	16.00	信勝社（小麦）（BEST-X）【18】 原富岡（Strict No.1）（BEST-X）	15.8	信勝社（鳥）（BEST-X）【3】 三龍社（龍）（X）【3】	-	
準優等（矢鳥格）	15.48	茂木（準飛切）【73】 龍興社（準飛切） 草薙合資（準飛切） 盛進社（準飛切）	20.68	20.60		13.4		14.08	日新館（龍）（矢鳥格 700個） 盛進社（人物）（矢鳥格 2000個）
八王子格	23.17	日新館（関西一番）【120】	18.26	16.90		18.6		14.89	茂木（九枚笛）（八王子格 800個） 橋館（菊）（準八王子格 1200個）
武州・上一番格	40.39	橋館（武州格） 小野（武州格） 小野社（上一番格）	35.45	34.10		26.3		48.08	小野社（青老人）（武州格 1500個） 小野（獅子・合）（武州格 1000個）
細糸	11.35		6.05	6.60		6.7		-	

資料：上川和雄「第一次大戦前における日本生糸の対米進出」（『城西経済学会誌』19-1 1983）第15表、『横浜生糸検査所六十年史』（1959）230-232頁、大日本糸会横浜支所調査『紐育生糸市場に現はれたる日本生糸の格』（1922）、藤本正雄『生糸貿易論』（1922）の「全国製糸格付」より作成。またニューヨーク市場での格付と横浜のそれについての照合には、早川直瀬『改版 生糸とその貿易』（1928）を参照した。

註1：【】内の数は糸格に対応するところの製糸場数ないしは商標数。

2：〈〉は商標名。

3：「X」はエキストラの略。なお、1919・20両年はニューヨーク市場での格付。

4：「盛進社」は若尾傘下の神奈川の製糸結社。

閲覧室から

横浜開港資料館所蔵
聖書資料(4)

廟祝問答

〔葉納清(Ferdinand Genähr)著〕

〔バラ・奥野日綱訳〕横浜米国聖

教書類会社明治一五(一八八一)年

18cm 1冊(41P) [197-3]

横浜米国聖教会社明治一〇(一八八七)年16cm 1冊(78P)

新訳全書引照 [193.5.3]

横浜米国聖教会社明治一〇(一八八七)年16cm 1冊(78P)

新訳全書引照 [193.5.3]

約百記旧約聖書 [193.5.3]

聖書常置委員会訳横浜米国聖

書会社明治一〇(一八八七)年

18cm 1冊(94P) [193.3.3]

馬太伝新約聖書 [193.3.3]

横浜大日本聖書館(Bible Societies' Committee for Japan)明治

一四(一八九一)年19cm 1冊(99P)

天道遡原 [193.6.8]

丁謙良(William A.P. Martin)著

中村正直訓(東京)〔山田俊藏〕

明治一〇(一八七七)年1〇月和

装23cm 1冊(2・2・2・112)

天道遡原 [191-1]

丁謙良(William A.P. Martin)著

中村正直訓(横浜)倫敦聖教書類

会社明治一四(一八八一)年六月

和装22cm 1冊(4・81)

天道遡原 [191-2]

請求番号を「」で示しましたので、

閲覧室でご覧ください。

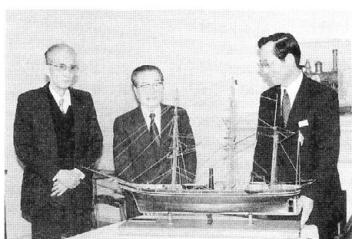
(石崎康子)

〔葉納清(Ferdinand Genähr)著〕

バラ・〔奥野日綱〕訳明治七(一八七四)年和装22cm 1冊

廟祝問答 [197-2-1]

資料だより



咸臨丸贈呈式(左から木村昌之氏、武川伸治氏、安田館長)

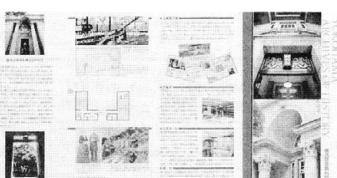
製作者の武川伸治氏から寄贈され、その贈呈式が1月14日午後、当館で行なわれました。同模型は、「館蔵資料展 横浜の近代PART III」で一般公開されます。

模型を製作・寄贈していただいた武川氏は、停年退職後趣味で帆船模型づくりを始め、咸臨丸の提督・木村撰津守の子孫(曾孫)の木村昌之氏(横浜市鶴見区在住)の

強いすすめで製作されたもので、1日4時間ほど作業に取り組み2年半の歳月を要したそうです。模型はすべて手づくりで精巧にできています。寸法は長さ約120センチ、幅約35センチ、高さ約80センチです。製作中は、マストの角度とロープの張り具合を調節する点などに苦労したとのことです。これまでに、サンタマリア号(コロンブスが大西洋横断に使用)など16、17世紀のヨーロッパの帆船を主に製作し、咸臨丸は8隻目です。

▼新パンフレット(大人用)が完成

昭和56年の開館以来使用されてきたパンフレットが、このほど表装も新たに生まれ変わりました。新パンフレットは、全面に横浜らしさを打ち出し、手にとってみただけで横浜開港資料館へ足を運んでみたくなる内容です。A3変形型・4ツ折り・カラー。当館・受付で無料配布しています。



新パンフレット(大人用)

▼展示

(1)「館蔵資料展 横浜の近代 PART III」2/7(金)~4/20(日) 開港期から明治大正期にいたる横浜の歴史を、当館所蔵のその時々の姿を表現する特徴的な資料によってあとづける。またあわせて絵葉書コレクションなどの新収資料も紹介する。

(2)「幕末明治大正昭和『横浜地図』展(仮題)4/23(木)~8/3(日)

▼寄贈資料

(1)咸臨丸模型 1器(磯子区汐見台武川伸治氏)

(2)『地理学評論』日本地理学会ほか31点(藤沢市弥勒寺 齊藤俊彦氏)

(3)『一億人の昭和史 1 満州事変前後』ほか 60点(港北区錦が丘 今井清一氏)

(4)株左右田財務銀行預金通帳ほか 2点(南区南太田町 米山彦郎氏)

(5)中山浩二郎家文書 601点(都筑区川和台 中山浩二郎氏)

▼寄託資料

(1)咸臨丸難行図(鈴藤勇次郎画、複製印刷物 付:木村浩吉趣意書=印刷物)ほか 4点(鶴見区北寺尾 木村昌之氏)

▼咸臨丸模型が当館に寄贈

咸臨丸の模型(50分の1)が、このほど